

【発達障がいは発達する～表情カード編～】

A子さんは、とても上手に表情カードを選択することができる。特に練習したわけでもないのに、5年ほど前に試した時にはすでに、怒った表情、満足の表情、心配の表情、がまんの表情など、5～6種類の表情カードから、今の自分の気持ちに当てはまる気持ち、そして過去のある時点の気持ち（つまり自分の気持ちを振り返ることができるということなのだ）を選択しながら支援職員とやりとりをすることができた。

そして今や、全40枚の表情カードを完全使いこなして、微妙な心の綾を伝えてくれるまでになっている。この40枚には「ひどいよ～、傷ついた」や「えへん！得意だ」なんていう表現もキャッチも難しいと思われる表情カードがかなり含まれていて、支援職員の方が、感心してしまうほどの腕前なのだ。時には、主語が自分ではなく、支援職員や母親だったりすることがあって、その表現能力の高さには驚かされるばかりだ。

例えば、「4月になってまた新しい職員が入ってきました。どうですか？」と問えば、「がちがち心配だ」のカードを選択し、それに応えて、「A子さんなら、大丈夫、ちゃんと上手につき合うことができるようになるよ」と励ませば、今度は彼女が「エッヘン、得意だ」のカードを選択するのだ。

また、「お母さん、電話でまた買い物に一緒に行きたいと言っていたね。あれほど大きな、人がいっぱいいるお店は苦手ですって何回も説明したのにね」と共感すれば、「ベー、反抗したい」のカードを選択するのだ。もちろんそんな中でお母さんが実際にお店に彼女を連れて行ってしまったときには、その振り返りの時に「ブチ切れた、ものすごく怒っている」のカードを選ぶことになるだろう。

彼女にはいくつもの発語がある。が、その語彙の中には感情を表す言葉は含まれていない。まさにこれが自閉症の感情表出の困難性という障がい特性なのだが、彼女の表情カードの選択能力ややりとりの姿を見ていると、その仮説に素直に同意することができる。彼女には、発語と

いう感情表出方法には確かに大きな困難性があるが、それは感情がない、感情がわからないということではなくて、感情は確かに彼女の中には内在するが、表情カードのような視覚的な媒介物に頼らなくては、それがアウトプットできないという事態にあることが理解できるのだ。

さらに彼女のやりとり能力は、最近、磨きがかかっている。彼女の食事支援方法は支援職員者側に、なかなかの経験とコツを必要とさせるのだが、その時の振り返りで、支援職員が「この間の新人さんの食事支援うまくいかなかったねえ」と問うと、彼女は「怒っている」の表情カードを選ぶのだ。それは、彼女が怒っているのではなくて、その新人職員さんが彼女のことを「怒っているんじゃないか？」という選択なのだ。主語が彼女ではなくて、新人職員さんになっているのである。だから支援職員の返答は「うまくいかなかったのは、あなたのせいじゃないよ、だれも怒っていないから大丈夫」が正解ということになるのです。また、「今度の面会、断るようになる？」に「うーん、困った」を彼女が選択するとき、それは彼女が困ったのではなくて、支援職員がそのことを母親に伝える時の大変さに配慮した「困っている？」なのだ。

自閉症の特徴を示す三つ組の障がいの一つに社会性の障がいと言われているものがあります。その領域は広く、①共感性が乏しい②場の雰囲気を読み取れない③人の気持ちの理解が弱いなどがあげられることが多いのですが、今まで説明してきたような表情カードの実践を見る限り、彼らには、十分共感性が育っているし、人の気持ちへの理解が弱いとも思えません。おそらくはその表出には課題があるものの、内在する感情は問題視するほどの差が定型発達の方々とあるとは思えないのです。

だとすれば、やはり、発達障がいは適切な環境に置かれれば、確かに発達するのであり、その適切な環境とは、どんな感情でも受け止めてくれる支持的な対人関係と、それに加えて感情の言語化を促進させる支援が提供ができる場ということになります。